

大豆のハスモンヨトウ若齢～中齢幼虫が多い状況です！

大豆ほ場における前回の見取り調査（8月中旬）では、ハスモンヨトウの発生ほ場率は平年より高い状況でした（植物防疫ニュース速報No.13参照）。

9月4～5日の調査でも、発生ほ場率、頭数とも、依然として平年を大きく上回っています（表1）。

なお、今回の調査では若齢～中齢幼虫が多く見られ、特に中齢幼虫（写真1）は調査ほの半数以上で発生しています。フェロモントラップによる成虫誘殺数も平年よりやや多く、9月の平均気温は高いと予想されていることから、今後も幼虫の発生と被害増加が懸念されます。適切な防除を行うとともに、発生の動向に注意しましょう。

表1 大豆におけるハスモンヨトウの発生状況

分類	発生ほ場率(%)		頭数(頭/25株)	
	本年	平年	本年	平年
ハスモンヨトウ発生ほ場	66.7	48.8	-	-
白変葉(株数)	36.7	20.3	0.2	0.2
若齢幼虫	46.7	22.2	10.8	4.7
中齢幼虫	53.3	27.0	4.9	1.6
老齢幼虫	26.7	16.9	1.0	0.6

9月4～5日15地点30ほ場で見取り調査を実施
平年値:平成14年～23年の平均値

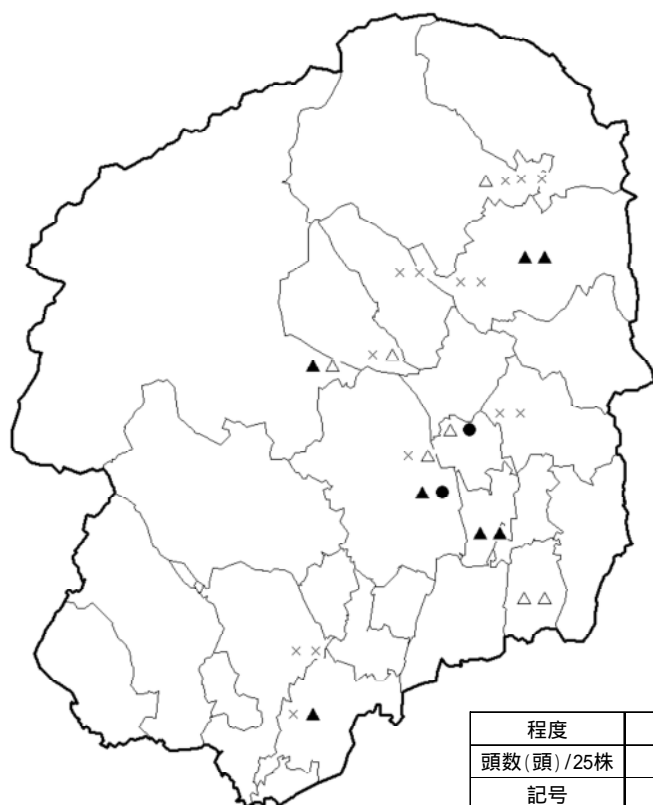


写真1 中齢幼虫

程度	無	少	中	多・甚
頭数(頭)/25株	0	1～5	6～25	26以上
記号	x	△	●	○

図1 ハスモンヨトウ中齢幼虫地点別発生状況（9月上旬）

【防除対策】

- ・ 幼虫が集団にいるうちに、葉ごと摘み取り処分する。
- ・ 幼虫の齢期が進むと防除効果が低下するので、若齢幼虫が集団にいるうちに下記を参考に薬剤防除する。なお、多発生時は幼虫の齢期がばらつくため、中齢～老齢幼虫にも効果がある薬剤を検討する。

表2 大豆のハスモンヨトウに登録のある主な薬剤（平成24年9月3日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期 / 本剤の使用回数	成分 / 成分の総使用回数
合成ピレスロイド系			
トレボンEW	1000倍	収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内
トレボン乳剤	1000倍	収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内
トレボン粉剤DL <豆類(種実)>	4kg/10a	収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内
その他			
トルネードフロアブル	2000倍	収穫7日前まで / 2回以内	インドキサカルブMP / 2回以内 ¹
フェニックス顆粒水和剤	2000倍	収穫7日前まで / 3回以内	フルベンジアミド / 3回以内
プレオフロアブル	1000～2000倍	収穫7日前まで / 2回以内	ピリダリル / 2回以内
プレバソンフロアブル5	4000倍	収穫7日前まで / 2回以内	クロラントラニリプロール / 2回以内

¹ インドキサカルブ及びインドキサカルブMPを含む農薬の総使用回数

上記の薬剤のうち、トルネードフロアブル、フェニックス顆粒水和剤、プレオフロアブル、プレバソンフロアブル5は老齢幼虫まで効果が期待できる。

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012